

111号によせて

千葉工業大学 名誉教授 小泉 俊雄



平成18年頃に国の機関を行政独立法人に変換すべく改革が行われた。その時の国土地理院長は現日本測量協会会長の矢口彰氏であった。矢口氏の言うには、国土地理院もこの時独立行政法人になる運命にあった。矢口氏は懸命に反対したが、有識者会議の委員からは独立行政法人になることが良いとの意見が大勢を占めた。もうだめかと思っていた時に、中央大学の教授の委員から、「国境を決める仕事は国土地理院が行うのであるから、それを行う官庁が独立法人、すなわち民間になったのではまずいのではないか」との発言があり、その一言で、地理院は独立法人化が免がれ、矢口院長は涙したという。私はこの話に胸の詰まる感動を覚えた。

またこのことは、独立法人化を審議するいわゆる学識経験者と言われる人達でさえ、地理院の仕事、すなわち測量の仕事の重要性を分かっていなかったということである。

私は大学で測量学を教えてきたが、国境の画定は測量学の基本なので、毎年試験には日本の離島を書かせる問題を出した。北方四島、竹島、対馬、尖閣諸島、沖ノ鳥島、南鳥島の位置を地図上に記入させ、矢口院長の話を毎回することになっているのだが、北方四島すら日本海側に書くなど思いもよらない解答が多い。ひとえに教えられてこなかったからであり、大学生も知らないのである。佐藤正久の資料¹⁾によると、日本青年会議所が高校生400名に対して、「北方、南方、日本海の国境を知っていますか」と聞いたところ、正解者は何と400名中たった7名であったという。いかに私たちが領土や主権をないがしろにしてきたかが分かる。

ドイツの法学者イエーリング (1818～92) はその書「権利のための闘争」²⁾ のなかで、「隣国によって1平方マイルの領土を奪われながら膺懲 (ようちょう) の拳に出ない国は、その他の領土をも奪われてゆき、ついには領土を全く失って国家として存立することをやめてしまうであろう。そんな国民は、このような運命にしか値しないのだ」と述べたが、今日の日本の現状を見ると、イエーリングの指摘の現状を見るような気がする。国土というもの、国境というものの意義を多くの国民が共有すれば、それを測る測量の仕事の重要性はおのずと認識できるはずである。

測量教育はどうあるべきか、測量の人材教育はどうあるべきか、常に議論されることではあるが、国土を測るという測量の重要性を根本から教育することで、測量への関心がおのずから高まり、測量への正しい知識が国民の間に広がっていくものと信じる。

日本測量調査技術協会は、国土管理の基本となる測量調査とその応用に関係した新技術の開発、普及、標準化等を進める公益法人であるが、その中に、国土を守るという理念を入れてほしいと願っている。

1) 佐藤正久：英霊の思いは自衛隊に引き継がれている、日本の息吹、10月号、2011

2) イェーリング (訳：村上淳一)：権利のための闘争、岩波書店、2005